

体育科

めざす子ども像

運動の好きな子ども

- ・自ら運動に取り組む
- ・自ら運動のしかたを工夫する
- ・運動への自信をもちている
- ・運動イメージが豊か(特性・コツを見抜く)

子どもの願い

- 「うまくやりたい」
- 「できるようにやりたい」
- 「ゲームで勝ちたい」
- 「コツがわかるようにやりたい」

楽しさ・喜び

欲求 → 満足させること

- 「本当に楽しかった」
- 「できるようになった」
- 「また、やりたい」

運動の特性のとらえ方
(その運動独自の魅力)

運動との出会い

成功感・満足感・達成感の連続

失敗感・欲求不満の連続

感性をいかに触発させるか...

運動イメージがより豊かになる

多様な運動イメージをもつ

自分なりに考え、工夫する

動きの中でイメージを再構築・修正する

ふり返し、新たなイメージをもつ

飛躍段階

- ・これまでのその子自身の経験がベース — 個人差への配慮
 - ・教師や子どもどうしの人間関係 — 自分を出せる雰囲気
 - ・運動経験の場を保障することによって動きの中でのイメージを大切にする = 具体的(内体で)活動
 - ・技術への着目のさせ方 (教材・発問)
- イメージを固定化させない。 技術構造

運動の嫌いな子

- ・できない
- ・どうやっていいかわからない
- ・したくない
- ・意味がないと思ってる
- ・運動イメージが湧かない(特性・コツがわからない)

9 体 育 科

須 山 博 充・川 中 昌 樹

1 体育科学習で豊かな感性を育むとは

本校体育科は、究極的には、「運動の好きな子ども」を育てることをめざしている。その方向に立った上で子ども一人ひとりに豊かな感性を育もうとしている。大切にしたいことは、子ども自身がこだわりを持ち、運動に主体的にかかわって没頭し、自分自身の納得を求めようとする過程である。自分自身が納得するような実感をともなったわかり方をし、さらにうまくなっていく、できるようになっていくことが大切にされなければならない。そうした過程の中でこそ、子ども達は豊かに感性を働かせ、さらに「よりよいもの」を求め、獲得しようとすると考え。こうしたことから、体育科学習において豊かな感性を育むとは、運動へのこだわりをもち、自己の納得に向かって能動的に運動に関わろうとする心を育むことであるととらえている。

(1) 昨年度の研究経過

豊かな感性を育むことをめざして、昨年度はおおよそ次のような考えを柱にして取り組んだ。

① 子ども一人ひとりの内面にある思いや考えを大切にする。

運動技能は、知的な働きやメンタルな面の働きによってその表出のしかたが影響されやすい。こうした心理的な働きは、子ども一人ひとりの心の状態や価値観によるところが大きい。子ども一人ひとりの内面にある思いや考えを大切にし、学習する仲間と共に高まる授業をめざす。

② 満足感・達成感のある授業づくりをする。

「十分動いて気持ちよかった」「すっきりした」という生理的満足感だけではなく、「やってよかった」「本当に楽しかった」「またやりたい」と思わせるような心理的満足感まで味わえるような授業づくりをする。

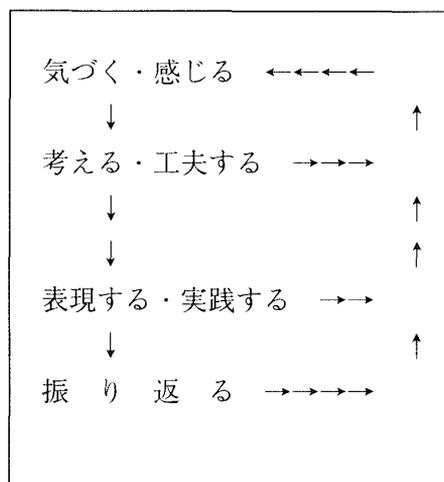
この2点をふまえ、子ども一人ひとりが「わかる・できる」喜びを味わうことをめざして、互いに見合い、教え合って学習する授業づくりを試みた。このような授業を通して、豊かな感性を育む授業づくりの条件と支援のあり方を探ろうとした。

(2) 取り組みの成果と課題

昨年度は、1年生ゲーム領域「宝島の大冒険」と4年生基本の運動「用具（なわ）を操作する運動」の2つの実践をもとに感性を育むための授業づくりの条件を探ってみた。この実践から、授業づくりにおいて子どもの内面に着目することは、感性を育てる上で重要な視点であることを確認することができた。また、授業づくりのポイントとして共通に確認された事からは、a) 子どもの実態の把握、b) 教材の与え方（運動との出会わせ方）、c) 学習集団の構成と組織化、d) 技術構造への着目のさせ方、e) 十分な課題追求の場の保障、f) 評価による次時の課題の明確化、の6点である。一方、「うまくなりたい」「どうしたらうまくなるのだろう」「この運動のこっちはなんだろう」といった子どもの願いを実現させる支援の手だてを十分明らかにすることができなかった。

2 豊かな感性を育む体育科学習

(1) 基本的な学習ステップ



「いいなあ」「うまいなあ」「きれいだなあ」

○ やってみたいなあ、がんばればできそうだと思うように感覚的にイメージしやすい運動との出会わせ方をする。

「どうしたらできるようになるんだろう」

○ 運動のイメージが持てるような動きに着目させる。

「こつがわかったぞ」「こんなふうにやってみよう」

○ 自分の課題追求の場や時間を十分に保障し、納得できるまで追求することができるようにする。

「今度はこんなふうにするぞ」

○ 振り返りの観点を示したカードを活用し、次時の課題が明らかになるようにする。

(2) 豊かな感性を育む授業づくり

前年度の取り組みから確認されたことがらをもとに、授業づくりのポイントを整理してみた。

① 運動との出合わせ方

子どもにとって運動の出会い方はさまざまである。すでに何度もやったことのある運動があれば、初めて出会う運動もある。どちらにせよ、その運動をどういう方向で追求していくかが大切なポイントとなる。子どもの実態を把握し、子どもの願い・欲求を満たすという側面を大切にしながらも、教師が教えたこと・気づかせたい価値に結び付けて、その方向づけを図る必要がある。

② 学習集団の構成・組織化

個人が追求する運動においても、集団が結果を競い合う運動においても、集団のもつ意味は大きいと考える。集団が、受容的で協力的であれば、個の考えや思いは実現の方向に向かって広がっていくであろう。学習する単元の特性を考慮して、学習集団を構成し、お互いに高まり合えるように組織していくことが大切であると考えます。

③ 技術構造への着目のさせ方

子ども達の「もっとうまくなりたい」「できるようにになりたい」という願いを子ども自らの手で実現させるためには、教師が一方的にこつを提示したり、励ましの言葉をかけるだけでは難しい。運動が「できなくてもよい」のでもなく、「できさえすればよい」のでもない。自分自身が納得するような実感をともなったわかり方をし、さらにうまくなっていく、できるようになっていくことが大切にされるべきであろう。そのためには、どんな運動をどんなふうを高めていくのか、その視点を提示し、子どもに着目させる必要があると考える。

④ 主体的に十分課題追求できる場の保障

自分の求めるこだわりのあるものに向かって、必死になって体を動かして試そうとし、自分の持ちうる限りのイメージを膨らませ、そのイメージを再構築しながら、よりよいものを求めていくことができるような活動の場と十分な時間が保障されていなければならないと考える。

⑤ 評価による次時の課題の明確化

自己の取り組みの結果が次の時間に生きることは、子どもが主体的に活動していく上で大切である。そのためには、本時の取り組みを振り返り、次時の課題が生まれるような授業の終末であることがたいせつであると考えます。